

気仙大工技術継承の課題と提案

農学部共生環境課程 都市・地域デザイン研究室

高橋響子、三宅諭

1. 緒言

かつて日本の木造建築は、大工職人らの間で古くから発展してきた伝統工法によって建てられていた。しかし、全国の大工就業者数は年々減少、高齢化が進んでおり、現在では伝統工法を簡略化した在来工法や海外から取り入れられたプレカット材を使用して建てられる住宅が増えている。大工職人の技術や経験は、長い年月をかけて蓄積された歴史的知的資源とも言えるため、貴重な資源の損失を食い止める必要性が指摘されている¹⁾。

岩手県沿岸南部の気仙地域（陸前高田市、大船渡市、住田町）には、江戸時代初期に発祥したとされる気仙大工と呼ばれる大工集団が存在していた。社寺や民家、学校、船など様々なものを高度な技術で作り上げるため、その建造物の歴史的価値は高く評価されている。しかし気仙地域でも大工就業者数の減少問題に加えて、2011 年に発生した東日本大震災の大津波によって気仙大工技術で造られた貴重な建築物がいくつも流失したほか、工務店や大工技術の教養を担っていた訓練校も被災するなど気仙大工を取り巻く環境は厳しさを増している。

一方、後継者を育成し地域の伝統技術継承に関与している訓練校の先行事例として、石川県の金沢職人大学校が挙げられる。金沢職人大学校は金沢独自の職人技術を継承することを目的として 1996 年に設立され、現在まで継続して修了生を輩出している。また、金沢市と連携することで歴史的建造物の修復や街並みづくりといったまちづくりにも関わっている。

本研究では、金沢職人大学校の事例を参考にしつつ、気仙地域の職業訓練校の課題を明らかにし、気仙大工の伝統技術継承に求められる仕組みを提案することを目的とする。技術を継承していくためには「人材育成プログラム」と「技術を発揮する機会」を整えることが重要になるため、この二つに焦点を当てることとする。

2. 研究方法

(1) 研究対象概要

i) 気仙地域

気仙地域とは、旧気仙郡である大船渡市、陸前高田市、住田町の二市一町からなる岩手県沿岸南部に位置する地域である。

ii) 気仙大工

気仙地方の地縁血縁で結成された大工集団が出稼ぎに出てその出稼ぎ地でつけられた名称が「気仙大工」である。気仙大工技術の特徴は、仕事の対象範囲が非常に広いことである。寺社仏閣を建築する技術や洋風建築の技術、家具や建具さらには彫刻を施すなど多くの技術を組み合わせて建築を行っていた^{2) 3)}。

iii) 気仙大工の復権と未来を考える会

気仙大工の認知度を上げることと地域を盛り上げることを目的とし 2017（平成 29）

年 11 月、大船渡市に設立された一般社団法人である。会員である地元の大工や建築士を中心に様々な活動を行っていく予定である。

iv) 金沢市

金沢市は非戦災都市であることから、城下町としての古い町並みや歴史文化資産が多く残っている。

(2) 調査方法

陸前高田市の建築設計事務所、岩手県職業能力開発協会、気仙大工の復権と未来を考える会（以下「考える会」とする）、金沢市歴史都市推進課、金沢職人大学校へヒアリング調査を行った。（調査期間：2018 年 9 月 4 日～2018 年 12 月 18 日）

3. 結果

(1) 大船渡職業能力開発センター

大船渡職業能力開発センターは県立の訓練校で 1949（昭和 24）年に開校したが、2011（平成 23）年の東日本大震災による津波で校舎が冠水し解体され、2013（平成 25）年に廃止となった。

(2) 気仙高等職業訓練校

気仙高等職業訓練校は 1958（昭和 33）年大船渡市に設置された認定訓練校であるが、津波により半壊状態となった。しかし解体された大船渡職業能力開発センターの機能を引き継ぐために 2012（平成 24）年度に訓練を再開している。カリキュラムは、高卒者を対象とした長期課程と社会人を対象とした短期課程の二つがある（表 1）。

(3) 陸前高田高等職業訓練校

陸前高田高等職業訓練校は 1958（昭和 33）年に陸前高田市に設置された認定訓練校であるが、津波により校舎が完全に流失している。2015（平成 27）年度から私有施設「杉の家はこね」の一部を借りて訓練を再開している。カリキュラムは高卒を対象とした長期課程のみである（表 1）。

(4) 気仙大工の復権と未来を考える会

大船渡市のコンサルタント会社 K 氏が、建友会の会員を中心に声を掛け、2017（平成 29）年 11 月に一般社団法人気仙大工の復権と未来を考える会が設立された。考える会は、若い人達の気仙大工に対する認知度を上げること、地域を盛り上げることを目的としている。

気仙地域に残された気仙大工が建築したとされる歴史的建造物を巡るツアーや、気仙大工や職人技術について市民に知らせるためのシンポジウムの開催などを今後予定している。現在、企画総務委員会、宣伝・広告委員会、建造物調査委員会の各委員会 3 つの委員会の設置が決まっており、今後会員が配置されれば活動は活発なものになると考えられる。

表 1 気仙地域の職業訓練校と金沢職人大学校の比較

	気仙高等職業訓練校					陸前高田高等職業訓練校		金沢職人大学校	
	長期課程		短期課程			長期課程		本科	修復専攻科
	木造建築科	建築設計科	板金科	建築科	介護職員初任者研修課程	木造建築科			
入学条件	高卒		企業、事務所ですでに働いている人			高卒		職人（職歴10年以上、各組合からの推薦）	本科修了生、建築設計士、大学教員、自治体職員
修業年限	2年		～6か月			2年		3年	3年
設置	大船渡市					陸前高田市		金沢市	
運営	職業訓練法人気仙職業訓練協会					職業訓練法人陸前高田職業訓練協会		公益社団法人金沢職人大学校（指定管理者）	
目的	職業能力の開発、向上					職業能力の開発、向上		職人技術継承、後継者育成	
施設	平成27年、新校舎使用開始					なし、私有施設を借用		実習棟二棟	
市民参加事業	×					×		○	
取得資格	技能士補 等					技能士補 等		「金沢匠の技能士」	「歴史的建造物修復士」

（５）金沢職人大学校

金沢市には古い建築物が多く残っていることから、地元の職人が技術を継承しながら残していく必要があると考え、公益社団法人金沢職人大学校が設立された。公益社団法人が指定管理者として金沢職人大学校の運営を行っている。金沢職人大学校は、金沢市に残る職人技術の伝承と人材育成、職人技術への評価、理解、関心を深めることを目的としている。その他の情報に関しては表 1 のとおりである（表 1）。

（６）訓練校の比較

入学条件：金沢職人大学校はすでに基本技術を取得している職人を対象とし、気仙地域の訓練校は主に高卒者を対象としている。

目的：金沢職人大学校は伝統技術の継承にのみ特化しているが、気仙地域の職業訓練校は職業能力の開発、向上を目的に働くための技術を習得する場であるという明確な違いがある。これらの違いから現在の気仙地域の訓練校では伝統技術を継承していくことは困難であると考えられる。

4. 提案

（１）人材育成プログラムの面から見た提案

気仙地域の人材育成プログラムを改善するために、一つ目に訓練校同士の連携を強化することが考えられる。また既存の訓練カリキュラムだけでは伝統技術を伝承することは難しいため、二つ目として新たに伝統技術継承のためのプログラムを形成する必要があると考えられる。訓練校の修了生や地元の大工を主な対象とし、訓練校の敷地を使って気仙大工の伝統技術を有する大工が数年間かけて指導を行う。

（２）技術発揮の機会の面から見た提案

気仙大工が今後も技術を発揮するためには、一つ目に行政と連携して公共空間に新たな建築物を造る機会を設けることが挙げられる。木材の準備や費用の確保など、気仙大工の技術を一般市民の住宅へすぐに取り入れることは難しい事柄であり、そこで行政が援助し先導することにより、すぐに利益は得られなくとも市民の関心を集めることができる。市民の身近にあり関心を得ることができれば、気仙大工の仕事に興味を持つ人も現れて後継者問題の一助となると考えられる。

二つ目は過去の建築物を修復もしくは改修する機会を設けることである。解体修復作業には伝統技術を体得した大工職人が必要不可欠であり、伝統技術を用いた建築物を残すことで後世に技術を保存することもできる。

以上のように気仙大工の伝統技術を発揮することができる現場が確実に設けられることで、職人から職人への技術継承が可能になると考えられる。

参考文献

- 1) 新川達郎、菊池静香（2014）：「川漁にかかわる職人技術の記録とそこにみる川・地域・人の関係再構築による地域活性化の可能性に関する調査研究 ～球磨川と多摩川を事例に～」：同志社政策科学研究 vol.15、No2、93-108
- 2) 平山憲治（1993）：気仙・匠・年輪—巨匠 花輪喜久蔵の足跡と技能伝承をめざして—：花輪喜久蔵事績録刊行委員会
- 3) 平山憲治（2013）：「気仙大工」概説：「(仮称) 気仙職人学校」設立準備室